



「 Aphrovelia 」

触れる肌の温かさが心地よい。
今はただ、二人でこの快楽を貪りたい。

◆ 概要

システム：クトゥルフ神話TRPG第6版(第7版への改変可)

プレイヤー人数：1人(KP側からPCを出してのタイマン形式 2PL改変可)

推奨技能：＜目星＞、平均以上の＜DEX＞＜POW＞

形式/舞台：クローズド/現代日本

所要時間：完全テキストセッション24時間程度

ロスト率：低(著しくSANが低い場合は可能性あり)

後遺症：エンドによってはあり

使用サプリメント：マレウス・モンストロルム

注意事項：R18・R18Gシナリオ

PC・KPC共に性転換をする要素が含まれる。

注意事項

※本シナリオには以下のR18及びR18G要素が含まれております。

18歳以下のシナリオの閲覧、及びシナリオのプレイを禁じます。

また、人を選ぶ特殊な要素が含まれているため、シナリオのネタバレなどを気にせずに、必ずKPとPLの間に趣味趣向の話し合いを行った上でのプレイをお願いいたします。

詳細な内容につきましては、下記項目の 含まれる要素について をご確認くださいようお願い申し上げます。

また、本シナリオに含まれる要素は実際に起こってはならないことであり、要素が現実で起こることを支持、肯定するものではないことをご理解いただきますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

- ・本シナリオは全てフィクションです。実際の団体・人物・事件とは関係ありません。
- ・神話生物や呪文についてオリジナルの解釈・改変が存在します。
- ・配布素材のセッション外での使用や加工、再配布を禁じます。
セッション用の加工につきましては、KPPLの遊びやすい形で行っていただいて構いません。
また、付属している衣装などのデザインは一例です。ご自由に改変や変更を行ってください。
- ・ネタバレ範囲に関しましては下記の ネタバレの範囲・扱いについて をご確認ください。
- ・シナリオの改変などは、悪意のないものであればご自由にどうぞ。
- ・シナリオは予告なく非公開にする場合がございますが、シナリオで遊ぶこと自体に制限はかけません。

ネタバレの範囲・扱いについて

シナリオ本編についてSNSなどで発言する際には、可能な限りPrivatter・ふせったー・ポイピックなどのクッションを挟むことの出来るツールの使用をお願いします。

立ち絵などの公開に関しては、ご自由に行って頂いて構いません。

あまりにも性的なものは、状況に応じて適宜センシティブ設定をしていただくなどのご配慮をお願いいたします。

エンディング報告に関しましては、エンドの種類・生還ロストまで記載していただいて問題ありません。

含まれる要素について

女体化/女体化からのふたなり化/快楽堕ち/合意のない性行為/複数人・異生物との性行為/NTR/孕ませ・出産に似た描写/失禁/体内放尿/脳への性的な表現/グロゴア/カルト教団と性的な儀式の描写

あらすじ

湿った何かが蠢く音が耳に届き、意識が浮上する。

あなたの視界が暗闇から解放されることはない。どうやら目隠しをされているようだ。

腕を動かそうとするならば、自分は両腕を上になげているような体勢であり、その腕同士を柔らかい何かで拘束されている。

さらに、体の前側にぬくもりを感じる。ぴったりと密着しているような状態だ。

その正体ははどうか人のように、その者は自分の背中辺りで、同じように手を拘束されているようだった。あなたに抱きつくような姿勢であるのだろうと理解する。

そして、強烈な違和感を覚えるものがあった。

自分を支えているもの。それは椅子やベッドなどでもなく。

感覚のみで判断するのであれば「肉の塊」だった。

◆ シナリオ背景

代々ある「邪神」を祀る家系に生まれた男がいた。

先祖たちは節度を守り神と接してきたが、男は強い欲望と支配欲を持っていた。

邪神の力を私利私欲のために利用し始めた男は、やがて自らの都合に合わせて教団を恐ろしい性カルト組織へと作り替え、その教祖となったのだった。

教団は表向き、「行き場をなくした人々を温かく受け入れる、優しい救済の場所」を謳っている。

教祖自身の柔らかな物腰や振る舞いも相まって、多くの人々が彼のもとに集まっていった。

しかし、その裏では快楽による洗脳が推し進められており、その不審な実態を暴こうと動いたのがオカルトジャーナリストの汐音だ。

彼女は単身で教団への潜入取材を試みるものの、目論見が見破られてしまう。

結果として汐音は教祖や神の洗脳によって信者の1人へと堕とされてしまった。

教団はさらなる規模拡大のために一般人の無理矢理な拉致・連行を繰り返していたが、PC達はその現場に偶然鉢合わせてしまう。

見過ごすことができず妨害をしたPC達だったが、その正義感が仇となってしまった。

「すべてを思い通りに動かしたい」と望む教祖は、自分の計画を狂わせたPC達を根に持ち、執着を募らせていくことになってしまったのだ。

PC達を屈服させ、教団へと引きずり落とすために、教祖は彼らを拉致し、信仰する「神の一部」をその身体に無理矢理取り込ませた。

両性具有の神の一部を摂取したことで、PC達の身体には「女体化」という変異が発現してしまう。

はたして、PC達は無事に元の身体を取り戻し、日常に帰ることができるのだろうか。

◆ 登場NPC

・教祖

性別：男 年齢：30代 身長：177cm

ヴーゾンファの子を信仰している性カルト教団「溺れし抱擁」教祖の男性。
穏やかな口調と佇まいで、一見すると慈愛に満ちているが、実態はすべての物事を己の掌の上でコントロールしなければ気が済まない極度の支配狂。
教団の計画の邪魔をしたPC達に対して執着と怨念を抱き、快楽に堕としてやろうと画策する。

名前や具体的なステータスはシナリオ内では決められていないため、必要であれば好きに設定してよい。

・汐音 滯(しおね みお)

性別：女 年齢：20代後半 身長：162cm

性カルト教団「溺れし抱擁」に所属している女性。
元々はカルト教団の秘密を探るべく潜入したオカルト専門のジャーナリストだったが、教祖にあっさりとその目的が露呈してしまい、ヴーゾンファに犯され孕まされ、現在は永久的狂気に陥り、ヴーゾンファの子と教祖に永遠の忠誠を誓っている。

教団に連れてこられた探索者達の世話係になる。
探索者達が反抗的でない限りは、よき教団の仲間、先輩として接してくれるだろう。

具体的なステータスはシナリオ内では決められていないため、必要であれば好きに設定してよい。

◆ 登場神話生物

・ヴーゾンファの子

名前の通り、「あらゆる海の生き物たちの父にして母」ともされる両性具有の神である「ヴーゾンファ」…の子ども。
子とはいえ見た目や性質はヴーゾンファと同じものであり、人間の性的快楽を糧として生きている。
見た目は蛸のようであるとも、蟹のようであるとも、クラゲのようであるとも言われている。

ヴーゾンファのステータスは存在しないため、「マレウス・モンストロルム P. 150」に記載のある「下級の異形の神たち」の項目を参照している。

◆ 登場用語・呪文

・ カルト教団「溺れし抱擁」

老若男女問わず人を引き入れては「神のため」と称して性行為を行い、快楽に溺れている性カルト教団。

「行き場をなくした人々を温かく受け入れる、優しい救済の場所」を謳っており、基本的には入信を拒まないスタイルではあるが、教団から抜けることは許されず、少しでも教団の意に反することを唱えれば、神の贄、もしくは苗床にさせられてしまう。

・ 悪魔退散/改変（基本ルールブック P. 249）

異生物に取りつかれている人間を自由にしてやるための呪文。10MPが必要。

永久的狂気に陥る前のミオが残したメモから取得可能な呪文。

PC、KPCに取り付いたヴーゾンファの一部や淫紋、寄生した子どもを取り除くために使用することになる。

・ 支配（基本ルールブック P. 259）

対象の意志を曲げて、呪文の使い手の意志の通りにさせることができる呪文。

今シナリオでは教祖が使用する。

次ページより本編となります。

KP情報は ※○○○○ のように記載いたします。

タイマン形式をベースとして作成していたため、KPCが話す場面や、KPCが一方的に酷い目に遭うシーンがありますが、KPPLの趣味趣向に合わせて立場を逆にする・描写を増やす などの改変を自由に行って頂いて構いません(寧ろ推奨です)

また、長めの描写が続くことがあります。

適宜描写を区切り、RPの時間を挟むようにキーパリングをすると丁度良い塩梅になるかと思います。

◆ 導入

時刻は夕方ごろ。
とある日の帰り道、あなたはKPCと行動を共にしていた。

※遊びでも仕事でも学校でも、ばったり偶然出会ったでも、なんでも構いません。
日常RPを挟むと良いかもしれません。同居をしている場合は適宜描写を変更してください。

話していればKPCと別れる道へ着く。
「じゃ、また明日」とKPCはあなたに軽く手を振り去っていった。

別れた直後、後ろからKPCの呻き声と、どさりと何かが地面に倒れる音がした。
振り返れば、気を失ってぐったりと脱力したKPCを、何者かが抱えている。

あなたがそれを認識したその瞬間、体にばちりと衝撃が走る。
体を支えることもままならず、あなたはその場に崩れ落ちる。
呼吸は浅く、体は動かない。

唯一動く瞳だけを動かせば、バチバチと音を立てるスタンガンを持った男が視界に映る。
あなたの意識がまだあることに気が付いたのか、スタンガンが再びあなたの体に押し付けられた。

再度の衝撃と共に、あなたの意識はぶつりと途切れた。

◆ 1日目

◇ 誘拐

※合意のない性行為の要素が含まれます。

趣味趣向に反する場合は、ヴァーゾンファの子の一部を取り込ませる描写をした後に意識を失わせるなどの描写スキップを行っても問題ありません。

誰かに呼びかけられる声で意識が浮上する。

視界がはっきりとしてくれば、あなたはここが車の中だということを理解する。

しかし広さは通常のそれとは大きく異なっており、所謂キャンピングカーのようなものだということもわかるだろう。

陽はすっかり沈んでしまっているようで、外から得られる光は少ない。

体を動かそうとすれば、腕は後ろ手にしっかりと拘束されており、動かすことができない。

気絶させられたことが響いているのか、体にも上手く力が入らない。

隣には同じような状態で拘束されているKPCがおり、あなたと同じく目を覚ましたようだ。

そんな自分達の目の前には、にやにやと気味の悪い笑顔を浮かべた男達がいた。

状況から察するに、彼らが自分達をこのような目にあわせた犯人達だろう。

男達「お、やっと起きたか？」

男達「おはよー、良く寝てたねえ」

Q. 何が目的？

男達「んー、上司？的な人に連れてこいって頼まれて」

男達「あとは…そうだな、あの時の恨みって感じか〜？」

Q. どこかで会ったことある？ あの時とは？

男達「は？覚えてねえの？ムカつく」

※この男達は、教団にとって不利益なことを働いたPC達を捕らえる為に教祖によって金で雇われた人間です。

■ <アイデア>

○成功

男達の顔を見て思い出す。

そういえば、数週間前に輩に絡まれている女性をKPCと共に助けたことがあった。

確か……その際に逃げていった犯人が、この者達ではなかっただろうか。

▽

男達「で、捕まえたらこれ飲ませりゃいいんだったよな」

男達「かわいそー、これ、アレの一部だろ？」

そう言い、男達の1人が小瓶を取り出した。

揺れる透明な液体の中に、赤黒いヒルのような生き物が1匹浮いている。
その生き物は小瓶の中で時折体をくねらせ、窮屈そうにぐるりと1回転した。生きていたようだ。
こんなものを今から飲まされるらしい。

男達「はい、じゃあお口開けてくださいね～」

無理矢理口を開かされ、強引に小瓶の中身を流し込まれる。
液体は想像以上に粘度があり、甘ったるい味と匂いがした。
ヒルのような生き物はぼとりと舌の上に落ちると、あなた達的意思など関係なしに、喉奥へと進み、食道へと流れ落ちていく。

■ <正気度喪失> 0/1d6

※この生き物は教団の信仰対象であるヴーゾンファの子の体の一部であり、これを飲まされたPC・KPCはヴーゾンファの子の支配下に置かれます。

下腹部に印が刻まれ(所謂淫紋)、常に性的興奮状態にあるような体になってしまいます。

また、これは教祖も予想していなかったことではありますが、この生き物を摂取したことにより、PC達は後々女体化をしてしまいます。

それを摂取した途端、体に異変が訪れた。
全身がじんわりと熱い。思考もどこか霞みがかったようにぼんやりとする。
それに気が付いたのか、男達があなた達の拘束を外し、服の中に手を伸ばす。
布が擦れる感覚にすら体が反応してしまい、抵抗もままならない。
笑いながら男たちは、あなた達の下腹部にするりと手を這わせた。
その瞬間、耐え難い刺激があなた達を襲う。驚きのあまり、自然と体をのけぞらせた。

あなた達はそこで理解する。自身に纏わりつく気怠さは、「快楽」と「興奮」によるものだ、と。
男の手が添えられていた部分を確認すると、奇妙な紋様が描かれていた。
先程飲まされたものが原因なのだろうか。

男が存在を確認するように、何度もその紋様を撫でる。
その度に快楽が波のように襲った。自身の熱がゆるゆると勃ち上がっていく。
男達の嘲るような笑い声が響いた。

男達「うわ、もうキいてんだ？」
男達「こういうのでも興奮できちゃうド変態なんだな～？」

あなた達的意思に関係なく熱を持つそれを、下着の上から撫でつけられる。
今行われていることへの恐怖、しかしそれに付随する快楽に、ぞわりと背筋が粟立った。

男達「つーか最近溜まってたんだよな」
男達「殺さなきゃ何しても良いつて言ってたしやってもよくね？」
男達「さっき飲ませたやつ、馴染むのに時間かかるんだっけ。しばらく様子見てろって言われたよな」
男達「まだ時間ある？」

あなた達の体を撫でまわしながら、1人の男が運転席に向かって声を上げる。

運転席から「もうしばらくかかるだろうから好きにしていそ」という答えが帰ってくると、あなた達を困っていた男たちが笑みを浮かべ、あなたの顎を無造作に掴み、口付けた。べろりと唇を舐められ、生ぬるい舌が差し込まれる。

● 抵抗する場合

差し込まれた舌をあなたは思い切り噛む。
口付けていた男が呻き声を上げて口を離し、あなたを睨みつけた。

男達「……ふーん、そういうことすんだ？」
男達「まだ自分の状況わかってないみたいじゃん。……おい」

目の前の男がふと隣_____KPCの方へと目をやった。
KPCもあなたと同じように口付けられていたが、その合図の瞬間、
KPCに口付けていた男が、彼の首を思い切り締め上げた。
悲鳴も上げられない程に絞められているらしく、彼から掠れた声が聞こえる。

男達「あーあ、お前が変な抵抗するからこいつ死んじゃうかもよ～？」
男達「こいつこの前やってる女の首絞めて危なかったんだっけ？」
男達「あー、そんなこともあったっけか」

ゲラゲラと男達の笑い声が響く。
あなたが抵抗の意思を失うのなら、男は満足そうに再びあなたに口付けた。

※あまりにもPCが抵抗するのなら、KPCだけでなくPC自身にも男達は暴力を振るうでしょう。

簡単に舌を差し込まれ、自分のものも絡め取られる。
唾液が流れ込み、舌同士を擦り合わされた。
呼吸が苦しくなろうとも、ペースは完全に相手に掴まれており、顔を背けることすら許されない。
頭に酸素が回らなくなってきた頃、やっと口を離される。
男と自身の唾液が混ざり合い、唇同士を繋いでいた銀糸がぶつりと切れた。
隣にいるKPCも同じ状況のようで、目に涙を溜めながら肩で息をしている。

男達「まさかここまで従順になるとはなー！」
男達「あ、そうだ。いいこと思い付いたわ」

KPCと口付けを交わしていた男が、ゆるく勃ち上がっている自身を取り出した。
KPCの表情がさあっと色を失っていくのがわかる。

KPC「……………な、なに、を」
男達「何ってホラ、お友達の目の前で男のモン咥えんだよ。できねえの？」

その言葉と共に、あなたの首筋に何かが添えられた。
鈍く白い光を反射するそれはナイフだ。

男達「できねえんだ？こいつがどうなってもいいってこと？」

その様子を見てKPCが取り乱す。

悔しそうに表情を歪ませた後、KPCは自身の顔を男のモノへと近付ける。

一瞬、ちらりとあなたの方を向き、視線が交わった。

しかしそれはすぐに気まずそうに逸らされ、耐えるようにぎゅっと目をつぶった後、口を開き、男のモノへと舌を這わせた。

男達「おいマジか、こいつガチで啜えてんの！」

男達「悪くねーじゃん、ほら、ちゃんと奥まで啜えて〜」

その光景から目を逸らそうとするのであれば、近くにいた男に無理矢理顔を掴まれ、固定される。

次第に大きくなる水音と、KPCの苦しそうな呻き声が車内に響いていく。

口から赤い舌が時折覗き、端からは飲み込みきれなかった唾液がぽたぽたと落ちていく。

……目眩がする。しかし同時に、体が熱くなっていく。

その感覚に耐えていれば、近くにいた男が再度あなたの熱を———今度は下着を軽く下ろし、直接触れた。

男達「こっちはこっちで大変そうだから手伝ってやるよ」

男達「男のモン啜えてるお友達見て興奮しちゃったんだもんな〜？」

男達「仕方ないでちゅね〜」

馬鹿にするような口調で語りかけながら、あなたのものを握り込み、ゆっくりと上下に動かしていく。

気持ち悪さしかないというのに、体が昂っていってしまう。

ちゅくちゅくという水音が聞こえる度に、自分が興奮しているのだということを突き付けられているようで、恥ずかしさや悔しさで視界がじわりと滲んだ。

KPCに啜えられている男の方も、興奮しきっているようで、KPCの髪を乱雑に掴み好き勝手に前後させていく。

驚いたようなKPCの声や水音が更に激しさを増す。

あなたが目を瞑ってその光景から逃れようとも、聴覚があなたの体を犯す。

あなたの熱を弄る男は、きっとこういう行為に慣れているのだろう。

敏感な先の部分をぐりぐりと押し潰し、かと思えば潤滑剤を器用に扱いながら上下に扱き続けていく。

確実にあなたの興奮の波を激しいものにしていった。

KPCが拒否するように頭を横に振る。

しかし興奮しきった男にそんなことは伝わっていないようで、KPCの頭を一際大きく掴むと、喉奥にぶちまけるように腰を押し付けた。

くぐもったKPCの悲鳴と同時に、あなたの耐えも限界を迎える。

がくりと腰が跳ね、強い快樂の波があなたを襲う。

びゅくりと白濁が飛び、近くで呆然としているKPCの体を汚した。

男達「あーあ、イっちゃったねえ？」

男達「ああいうの好きなんだ〜？」

まるであなたが悪いとでも言いたげに、近くにいる男が耳元で囁いた。

息を整えようとするあなたをさらに責めるように、耳元に口を近付けねっとりと舐る。

男達「あ？こいつマジか！」

KPCを好き勝手使っていた男が、楽しそうに声を上げる。

KPCの体を軽々と抱え、あなたと向かい合うようにすれば、彼の脚を無理矢理開かせ、ズボンや下着を寛がせていく。

男達「コイツ、男のモン啜えながらイッたらしいぜ？」

男達「アレ飲ませなくても才能あったんじゃねえの？」

ひくひくと震える友人のそれは、確かに白濁に塗れていた。男達の嘲る笑い声が響いていく。

KPCは口を強く閉じたまま何も言わないが、肩を跳ねらせたりする様子から察するに、泣いているのだろう。

男達「なー、もうヤッてもいいよな？我慢できねえ」

男達「いいだろ、俺もだわ」

どん、とKPCの体があなたに向かって突き飛ばされた。

すっかり脱力してしまった彼の体をあなたは支えることになる。

※KPCと少しだけ会話ができます。

▽

話をしていれば、男たちがあなた達を挟み込むようにして取り囲む。

そしてぬるり、と下半身の後ろ側に違和感を覚えた。

熱くて固い、しかし湿り気を持った何かが、何度も何度も擦り付けられていく。

擦り付けられる度に湿り気は増してゆき、ぬるぬるとした感覚がする。

気持ち良い、と。そう感じてしまう。

KPCも必死に抵抗の言葉を紡いでいるが、そこに甘さが孕んでいるのを、あなたですら理解する。

息が漏れる。腹が疼く。

早くナカを満たして欲しい。

奥まで貫いて欲しい。気持ち良くして欲しい。

ずぶ、と、男のそれがとうとうあなた達を穿つ。

十分な程に濡れたそれは、何度かの浅い抽挿を繰り返しながら、確実に奥へ奥へと入り込んでいく。

男達の悦に浸った声と吐息を感じ、あなた達は浅い息を吐く。

やがて男達はあなた達の腰を乱暴に掴み、動きが激しいものへと変わっていく。

消えない圧迫感。内臓を、ナカをぐりぐりと固いもので直接擦られる感覚。

それはもちろんあなた達が感じたことの無いもので、頭が上手く回らない。

今あなた達にわかるのは、この行為が苦しく、しかしとてつもなく気持ちが良い、ということだけだ。

車内に響く水音と肌同士がぶつかり合う音が自分の体から発せられているということなど、信じたくもない。

男達がより一層奥を穿ち、呻く。直後にどくどくと何かが体に流れ込んでくる。
ナカで達したのだろう。腹の奥がじわりと熱くなる。
気持ち悪い。気持ちが悪いはずなのに。じんわりと広がる、溶ける腹の中の熱が気持ち良い。

男達「あーあー、まだこんなに締め付けちゃって」
男達「ちょうどいいじゃね？まだ出し足りねえしやろうぜ」

再び男達が動く。達したばかりの敏感なナカは、意識せずとも男達のをきゅうきゅうと締め付けた。気持ち良い。気持ち良くてたまらない。

男達「もうさあ、気持ち良い～って締め付けて離してくんねえんだよねえ、こいつ」

KPCを抱いていた男が、あなたに見えるようにその接合部を露わにする。
隙間からはKPCの体内に出された白濁がどろりと流れ落ち、男のモノを加えこんでいる穴はひくひくと収縮を繰り返している。
……きっと、自分も同じような状況になっているのだろう。そう考えると、……酷く、興奮した。
後ろの男が嬉しそうに呻く声が聞こえる。

男達「なんだよ…アレ見て興奮したの？」
男達「まだまだ出したりねえからさ、付き合いよ？」

そうしてまた律動が始まる。
意識を飛ばそうとすれば、強い快楽により無理矢理引き戻される。
そんなことを幾度も幾度も繰り返され、解放された頃には、全く体を動かせない状態になっていた。

男達が何かを話していたが、それに耳を傾ける余裕もなく、あなた達は今度こそ意識を手放した。

◇ 女体化

※男性=教祖、女性=ミオです。

男性「ここまで好き勝手したのはいただけないけれど、頼んだことはしっかりとやってくれたみたいだね、彼らは」

女性「ええ。…しかし驚きましたわ。本当に体が変わってしまうなんて」

男性「やはりあの神の子にはまだまだ未知の力がある。これからも大切に育てていこう」

男性「彼ら…いや、今は彼女達…の方が正しいのかな。彼女達のことは任せたよ」

女性「はい。わかっておりますとも」

そんな男女の会話を聞きながら、あなたはゆっくりと意識を取り戻す。

しかし体の自由は効かないようで、機能するものといえば目と耳ぐらいだった。

女性「あら、起きてしまったのかしら」

あなたの視線に気が付いて、青色の髪をした女性が、困ったように言った。

女性「でも、まだダメよ」

女性「もう少しだけ眠っていてね」

そうして、女性の手のひらがあなたの顔を優しく覆う。

あなたの意識は再び闇に沈んでいった。

◇ 目覚め

※PC、KPC共に女体化し、触手が蠢く部屋に閉じ込められ、触手に好き勝手体を触られる描写が存在します。

湿った何かが蠢く音が耳に届き、再度意識が浮上する。

しかしあなたの視界が暗闇から解放されることはない。目隠しをされているようだ。

腕を動かそうとするならば、自分は両腕を上にならげているような体勢であり、その腕同士を柔らかい何かで拘束されている。

さらに、体の前側にぬくもりを感じる。ぴったりと密着しているような状態だ。

その正体ははどうか人のように、その者は自分の背中辺りで、同じように手を拘束されているようだった。あなたに抱きつくような姿勢であるのだろうと理解する。

それはあなたが動くとびくりと震え、混乱したように小さく声をあげる。

顔も近くにあるのだろう。吐息があなたの肩を湿らせた。

そして、強烈な違和感を覚えるものがあつた。

自身を支えているもの。

それは椅子やベッドなどでもなく、感覚のみで判断するのであれば「肉の塊」だった。

動けば動くほどぐよくよとした感触が体に伝わり、まるで何かの胎内にいるかのような感覚だ。

やがて、ぬるりとあなたの太ももや腕に何かが伝う。

それはヒトのような体温を宿していながら、しかし蛇のような動きであなたの肌をゆっくりと撫で、分泌されているであろう液体で肌を濡らしていく。

触れられた部分がじんわりと熱を持ち、思わず息が漏れた。

近くにいる人物もどうやら同じ状況のようで、体を小さく跳ねさせ、「ん、ん」と耐えるような声を出している。

※近くにいる人物=女体化したKPCです。少しだけ会話ができます。

▽

謎の生き物の蠢きに耐えつつ、状況を把握していた時だった。

液体が染みた影響からだろうか、あなたの視界を覆っていた布がずるりとずれ落ちる。

自然と近くにいる人物と目が合った。

顔を赤らめさせ、肩で息をしているその女性は、どこかKPCを思わせる風貌をしていた。

● 自分の体を確認する

自分の体を確認すれば、女の体に変化している上に、見慣れない服を着せられている。

それは例えるならシスター服…のように思えるが、それにしては布面積が少なすぎる。

あまりにも悪趣味で動き辛い格好だ。

※KPCと会話をすることもできますが、KPCもPCと全く同じ状況のため、何を聞いたとしても「わからない」としか返ってこないでしょう。

▽

そして次に視界に入るのは、自分達が今いるこの場所だ。認識し、思わず息を呑むかもしれない。

ここは到底部屋と呼べるものではなかった。

広さは家にあるクローゼット程の狭さしかなく、天井であろう場所、床であろう場所、壁であろう場所…どこに視線を移しても赤黒い触手で覆われている。

その全てからぼたぼたと涎のように液体が分泌されていた。

触手のプールに落とされた、とでも表現した方が正しいのかもしれない。

液体が体に垂れる度に、自身の口からあられもない声が出てしまう。

触手が全身をぬるぬると舐めまわしている。

——きもちいい。

そんな思いが頭を掠めていった。

やがて、赤黒い触手が2本、あなたの腹を伝い両胸へと到達する。

暫し観察するように身を擡げ静止した後、その先端がまるで開花するようにゆっくりと、粘液の糸を引きながら開いていく。

開かれた中には待ち侘びたように激しくうねる細い触手が潜んでいた。

細い触手が伸び、あなたの乳房の先端へと触れ愛撫を始める。

舐めるような動きをしたかと思えば、抓り、痛みを与えてくる。

しかしそんな痛みの中でも、あなたは小さな快楽を得てしまうだろう。
やがて花のように口を開いていた部分も胸へむしゃぶりつくように貼り付いて、あなたの乳を揉みしだき、吸い上げる。

あなたが絶頂を感じようとした瞬間、ぴたりと触手の動きが一斉に止まった。
昂っていた熱が徐々に冷えていくのを感じる。

再度、触手が動き始める。
しかし敏感な部分に触れることはなく、あなた達の体をゆっくりと這いずり、時折締め付けてくる。
この触手達は自分達を絶頂へ導くつもりはないのだ、とあなた達は理解してしまう。
このままこの場所で、一生解放できない快楽を与え続けられることになるのかもしれない、という恐怖に侵されていく。

■ <正気度喪失> 0/1

▽

女性「あら、その様子だと目を覚ましたのね」

ふと、触手の塊のその向こう側から女性の声が聞こえてきた。
その声は、あなたが先程意識を取り戻した際に見た、あの青い髪の女性のものだ。

女性「あなた達、少し悪いことをしたと聞いたから、この子達にお仕置きをしてもらってるの」
女性「何をしたかちゃんとわかってる？」

常に笑みを含んだような声。優しくもどこか蔑まされているような印象を受ける。
そんな会話をしている間にも触手はあなた達を責めることは止めず、顫動し続けている。

Q. 自分達は何もしていない

女性「あらあら…そんなことを言っているところから出してもらえないわよ？」

▽

本心かはさておいて、震える声であなた達は謝罪の言葉を口にする。
その後、ガチャリ、と扉の鍵が開けられる音がした。
それとほぼ同時にあなた達の体は触手から解放され、外へと投げ出される。
久方ぶりの新鮮な空気に荒く息を吸い、部屋の眩い光に顔をしかめた。

そこに立っていたのは、やはりあの時の女性だ。あなた達2人の様子を見て眉を下げて笑っている。
女性はあなた達が捕らわれていた小部屋に近寄ると、飛び出し蠢いている触手を一つ持ち上げ撫でた後、口付けた。

女性「ありがとうございました」

女性「これでこの者達も反省し、己を改めてくれるでしょう」

■自分達が閉じ込められていた小部屋に対して <アイデア>

○成功

小部屋、といっても少し大きめのクローゼットのようなものだ。
教会に設置されている「告解室」と呼ばれるものだということをあなたは知っている。
主に、信者が自らの罪を司祭に告白して、神のゆるしを得る場として使われているものだ。

○失敗

小部屋、といっても少し大きめのクローゼットのようなものだ。
それ以上のことはわからない。

女性「……ね？反省したわよね」

女性は小部屋の扉に鍵をかけ、再度あなた達に向き直り、微笑みながら小首を傾げた。
以降、女性に対して質問が可能。

Q. 反省とはなんのことだ

女性「ここに来るまでに相当暴れたと聞いていたから…」
女性「今日からここに所属する者になるのだから、そういった荒事はやめてね？」
女性「ただ、こちらも野蛮だったことは謝るわ。ごめんなさい」

Q. ここはなんだ？

女性「ここは私たちの教団、“溺れし抱擁”が活動している場所よ」
女性「これからあなた達も、この教団のためにたくさん働いてもらうわね」
女性「とっても素敵なことよ？おめでとう！」

Q. 教団の目的は？

女性「言うなれば…ヒトも神様も気持ちよく過ごせる世の中にする…かしら？」
女性「ほら、世の中なんて辛いことばかりでしょう？」
女性「ここはそういう、世の中に疲れてしまった人を助ける場所なの」

Q. お前は？

ミオ「私はミオ」
ミオ「今日からあなた達の教育係になるわ。よろしくね」

▽

ミオ「体がべとべとで気になるでしょう？」
ミオ「こっちに大浴場があるの。疲れたでしょうから、そこでゆっくり休むといいわ」

会話が終わればこの部屋からは出ることになるだろう。
廊下には香でも焚かれているのか、常に甘ったるい香りがあたりに充満している。
息をするたびに思考が揺らぎ、自身の髪が体に触れるだけでもどこか興奮を煽る。

床には高級そうな敷物が敷かれており、等間隔に燭台が灯されていた。
錆び一つないゴールドの装飾が美しい。
オーソックスな西洋風の館といった雰囲気であり、こんな状況でなければもの珍しさに喜びもしていたかもしれない。

ふと壁に掛けられている大きな布に視線が向いた。
海をイメージしたような深緑色の布に、触手がいくつも絡まったような模様が一つ、描かれていた。
先程自分たちの体を好き勝手に触っていた触手のことを思い出す。
恐らくはあの触手がこの教団の信仰対象であり、きつとろくなものではないのだろう。
とんでもない所に来てしまった、と。背筋に寒気が走る。

長い廊下を歩き続け、角を曲がった時だった。
女性の大きな悲鳴があなた達を貫いた。
……いや、これは。悲鳴というよりは、嬌声だ。
前を歩いていたミオは、目の前に広がる光景に「あらあら」と声を漏らす。
しかしその言葉のわりには、まったく焦りは見られず、むしろ楽し気に目を細め笑っていた。

自分達の目の前に広がる光景。
修道服を着た男女二人が、人目も憚らず体を重ね合っていた。
服装から察するに、どちらもこの教団の一員なのだろう。
特に女性の方はあなた達と同じような修道服を身に纏ってはいるが…男に弄られたのだろう、それはもう服として機能していなかった。
既に何度か行為は繰り返されているようで、男女が繋がっている部分からはどろりと体液が流れ出している。

女性「み、ミオさまっ…！ だ、だめ、人が来てる、う…」
ミオ「まあまあ、精が出るわね～文字通り」

行為に耽っていた女は慌てたように男の胸を押す。
しかしそれは言葉だけらしく、その手に全く力が入っていないことはあなた達にもわかる。
男といえば、このような状況にも関わらず、目の前の欲を貪ることしか頭にないようで、会話の最中でも関係なしに腰を動かし続けている。

ミオ「驚いた？でもね、これがここの普通なのよ」

ミオがあなた達の方を振り返り、微笑みながら言う。
抱かれ、我を失ったように喘ぎ声を漏らす女性に近付き、指で彼女の胸前の布を捲り上げた。

ミオ「ふふ…私たちが信仰している神様はね、性欲…つまり、”性を好む”の」
ミオ「だからこの行為だって悪いことなんかじゃない。神へと捧げる大切なもののなのよ？」

ミオは捲り上げた布の下に覗く、信者の胸を優しく触りながら言葉を続ける。
それを見せつけられれば、男は我慢が効かなくなったのか、涎を垂らしながら噛みつくように女の胸を口に含み、舌で転がした。女は仰け反り、白い喉を晒しながら気持ち良さそうに喘ぐ。

もう行為のこと以外など眼中にないようで、あなた達には目もくれず男の腰に脚を絡ませ、もっと、きもちいい、と、嬉しそうな笑みを浮かべながら体を揺さぶられている。

正気じゃない。そんなことはわかっているのに、下腹部が熱を持っていく。
本来自分には存在しなかったはずの、腹の奥……膣が、子宮が疼いた。

■ <正気度喪失> 0/1

■ <聞き耳>

○成功

近くにある複数の扉の奥から、同じような嬌声が聞こえる。
おそらくここだけではなく、あらゆる部屋で同じような行為が行われているのだろう。

ミオ「あなた達もしたければここでしたっていいけれど…でも休息をとる方が先よね」
ミオ「ほら、もうすぐ着くわよ。行きましょう？」

そんな狂った景色を通り抜けながら、あなた達は再び歩き出す。

◇ 大浴場

※浴室内で触手に体を弄ばれる描写が含まれます。

大浴場へと辿り着けば、あなた達の到着を待っていたのか、2人の信者がぺこりと頭を下げ、あなた達を迎え入れた。

ミオ「じゃあ、二人のことをお願いね」

信者達「はい、かしこまりました」

信者達は手馴れた様子であなた達の服を脱がせていく。

その後、「こちらです」と手を引かれ、大浴場の中へと足を踏み入れた。

随分と丁寧に清掃されているようで、床も天井も、汚れひとつない。

信者達「では、洗っていきますね。体を楽にしてください」

信者の手があなた達に伸び、泡立てられた石鹸が足や手の先から丁寧に肌に擦られていく。

※服を脱ぐのも洗われるのも、断ることはできます。信者達もしつこくは迫ってきません。

奇妙な服装なので脱ぐために DEX*5 などを振ってみても良いでしょう。

▽

体を洗われた後は湯船に浸かるように指示される。

白く綺麗な大理石で作られた風呂はやはり清潔感があり、湯船に少しだけ足を沈めてみれば、ちょうど良い温度であなた達を包み込む。

ゆっくりと肩まで浸かれば、その心地良さに無意識に息を吐いた。

再度、自分の体を確認することになるだろう。

やはり何回見ても、普段あるものがなくて、無いものがある。

下腹部には奇妙な紋様がついたままだ。自分の体は一体どうしてしまったのだろう。

■ <目星>

○成功

少し奥の水面が不自然に揺らめいたように見えた。

※浴槽の中にヴァンゾンファの子の触手が身を潜めています。

▽

風呂の心地良さに身を委ねていた時だった。何かがぬるりと足に触れた。

びくり、と無意識に体が反応してしまう。今のはなんだろうか。

反射的に湯船の中を確認する。しかしそこには何もおらず、ただ水がゆらゆらと揺れているだけだ。

そろそろ上がろうか、と上体を湯船から出そうとした時、脚に何かが絡みつки、再度あなた達を湯の中へと引きずり込む。

気のせいではない。この湯の中に何かがいる。

そう気付いた瞬間、粘着質な音を立てながら透明な触手が水面から身を擡げた。

それを認識すれば、あなた達が今入っているこの風呂の半分以上が、その透明な触手達が敷き詰められて出来ていることに気付いてしまう。

■ <正気度喪失> 0/1

あなた達を逃がすまいと触手が何本も脚に絡み付く。ざぶんと水面が大きく揺れた。

やがて脚を広げさせられると、透明だが肉厚な触手が下半身…秘部や陰核を舐めるように撫で付け始めた。

がくんと体が跳ねる。

しかし、それだけだった。触手はあなた達の敏感な部分を舐め回すだけで、決して中や奥には触れてくれない。

先程、別の触手にも似た責めをされていたことも相俟って、腹の奥の切なさが止まらない。

はやく、中に欲しい。奥をめっちゃくちゃにして欲しい。

気持ち悪いのに、気持ちがいい。

早くこんな所から出なければ、と。頭ではわかっているのに。

あとは腕に力を入れて立ち上がるだけだというのに、体がいうことを効かない。

それでも更に力を振り絞れば、あなた達はその触手の海から逃れることができるだろう。

触手が風呂の中で物寂しそうに蠢き続けているのが見えた。

▽

その後は風呂場の出口へと向かうことができる。

怪物に関して信者達に問うのであれば、「ここは神様もお使いになられますので…」と至極当然のように返されるだろう。

また、風呂から上がった後は大きめのバスローブを着せられた。

着替え終えると、タイミングよくミオが戻ってくる。

ミオ「あら、ちょうどよかったみたい。ゆっくりできた？」

ミオ「さ。じゃあ先程話した通り、あなた達の部屋に案内するわ。ついてきて」

ミオに文句を言うのであれば、あらあら…という態度で流されるだろう。

とにかくにも、彼女についていくしかなさそうだ。

◇ 自室の探索

ミオの後をついていけば、やがて一つの部屋へとたどり着いた。

ミオ「ここがあなた達の部屋よ」

ミオ「元々は私の部屋だったの。ちゃんと掃除はしたつもりなのだけれど…」

ミオ「気になるところがあったらごめんなさいね」

ミオ「明日の朝、ご飯を届けに来るわ。何が食べたい？」

ミオはあなた達の返答を聞くと、笑顔で部屋から出ていった。

扉が閉じられ、外から鍵のかかる音がする。

確認するのであれば扉は施錠されているようで、自分たちがいる側からは開くことが不可能な作りになっていることがわかる。

……つまりはこの部屋に閉じ込められてしまった、ということだ。

白を基調とした部屋は整えられており、清潔な印象を受けた。

[探索可能箇所] 机と椅子、ベッド、クローゼット、窓

▼机と椅子

綺麗に拭かれた机の傍に椅子が二脚設置されている。

作業を行ったり食事をするには申し分ない大きさだろう。

▼ベッド

白い天蓋付きのベッドだ。

二人が大の字で寝転がってもなおスペースが余る程の大きさであり、触り心地も悪くない…どころか、非常に丁寧にベッドメイキングされている。

どうやらこの場所での自分たちの扱いは、そこまで悪いものではないらしい。

……が、男である自分達にとって、お姫様のようなこのベッドが準備されているという事実は些か気味が悪い。

▼クローゼット

先程まで着ていた、ふざけたデザインの修道服の換えが何着か仕舞われている。

……明日もこれを着ることになるのだろうか。

▼窓

外を確認できるが、開けることはできない。

少し遠くには海が見える。この屋敷は岬のような場所に建っているようだ。

探索を終えれば就寝となる。

◇ 深夜

※蟲姦のような描写、卵を産みつけられる描写 が含まれます。

ちくり、と首に何かが刺さる感覚で目を覚ます。

徐々に覚醒していく意識の中で、KPCの苦しそうな声が聞こえた。

寝起きでぼやけた視界が段々と明瞭になっていく。

目の前にあるのは、頬を紅潮させ、目には涙を溜め、何かから必死に耐えるように、ベッドのシーツを握り込み、荒く呼吸をしているKPCの姿だった。

声を掛けようとして、あなたは気付く。体に何か重たいものがのしかかっている。

暗い部屋の中、その姿を確認した。

それは虫だった。…いや、虫と呼ぶには少々形が歪だろうか。

あなた達二人を簡単に抱え込めるような巨躯。

その体は原生生物のようにうねり、虫の体から分泌される液体が滴り落ちれば、昨日責め抜かれた時と同じような快樂が迸っていった。

脚はクモのように胴体から複数本生えており、あなた達を大事そうに抱え込んでいる。

体が痺れたように動かない。

KPCも同じようで、虚ろな目をしながら、しかし焦りを含んだような顔であなたの服を掴んでいる。

彼の首筋には赤い噛み跡が残っている。恐らく自分も彼も、この怪物に噛みつかれたことが原因で、動きを制限されているのだろう。

怪物の体から無数の触手が伸び、あなた達の体を品定めするように優しく触れる。

やがて一本の触手が唇に触れ、割り入るようにして口内へと侵入する。

ぬめった触手が舌の上で口内の唾液を全て絡めとるようにその身をくねらせた。

喉奥を突き、進んでは戻ってを繰り返すその感覚は、まるで喉を犯されているようだった。

やがて触手が大きく膨らんだと思えば、粘度のある甘ったるい液体を喉奥へと流し込んだ。

飲みきれなかったものが口から溢れ、ベッドを汚す。

噎せ返りながらも息を整え、気付く。体に力が入らない。飲んだ液体の影響だろうか。

怪物が鳴き声を漏らすと、管のような触手を一本ずつ、あなた達の秘部へと添えた。

いつの間にか驚くほどに濡れていたそこは、自分を埋めてくれるものを求めてひくひくと震えている。

それを察してか、触手が幾度かそこを撫でると、一気にその管を突き入れた。

あまりの快樂と衝撃に体が仰け反り、足先までぴんと伸びる。

蟲はその様子を暫し眺めた後、体をぶるりと震わせた。

何事かと確認すれば、管を通して、透明なゼリー状の卵が自分に向かって送られてきている最中だった。

卵…… 卵？

自分はこの怪物の子どもでも孕まされるのだろうか。

ごぼり、ごぼりと音を立てて腹の中にそれが送り込まれていく。
肉を押し広げて侵入してくる圧迫感と快楽に脳が混乱を起こしている。
ひとつ、またひとつと送り込まれて来る度に、既に排出されていた卵とぶつかり合い、ごろごろと腹の中で肉を擦り蠢いてはあなたに刺激を与えた。

やがて全てを出し終えたのか、ゆっくりと管が引き抜かれていく。
やっと終わったのか、と息をつくかもしれない。
それも束の間。太い触手が二本、あなたたちの目の前でぶくぶくと膨れた。
ぬちゃりと音を立て皮のようなものが剥かれ、肉々しい触手が飛び出した。
それはまるで男性器のような形をしており、至る所がボコボコと疣のように膨らんでいる。
それを見せ付けるようにあなたたちの顔に幾度か擦り付けた後、秘部へゆっくりと突き入れていく。

奥への刺激を得ることが出来なかったあなた達にとって、まるで電撃のような快楽だった。
腹の中に入っている卵がゴロゴロと暴れ、敏感な所を擦り上げていく。
あなたが声を上げれば上げるほど、怪物は楽しげにナカに入った触手を動かしていく。

それは段々と激しいものへと変わっていき、はしたない水音が部屋中に響いている。
太い触手が子宮口に触れ、捏ねる感覚がたまらない。
ナカで卵が触手に掻き混ぜられ、予測のできない箇所に卵が触れるのが気持ち良い。

_____ ああ、でも、こんなに強くされてしまっては、卵が壊れてしまう。

……………？
自分は今、何を考えた？

激しく揺さぶられながら、蕩け始めた思考を働かせる。
怪物に産みつけられた卵なんて、壊れた方が良いに決まっているのに。
そんなことを考える度に、妙な感情がきゅうと胸を締め付ける。
自分は体だけではなく、精神までも怪物に蝕まれ始めているとあなたにはわかる。
嫌だ。変わりたくない。変わりたくないのに、気持ち良いのが、止まらない。

廊下で聞いた嬌声のことを思い出す。
きっと自分のこの淫らな声も、外に聞こえてしまっているのだろう。
ギィ、と怪物が鳴きながら、挿入していた触手を奥へと突き入れ、あなたのナカで精を吐き出した。
人間のものよりもずっと大きいそれは射精も長く、飲み込み切れなかった精が結合部から溢れ出した。
それでもまだ出し足りないらしく、先程よりも掻き混ぜ易くなったあなたのナカを弄んだ。
あまりの快楽にちかちかと視界が明滅する。

絶頂を迎えても迎えても怪物が満足する気配はなく、あなた達は意識が完全に途切れるまでその身を犯し尽くされた。

※ サンプルはここまでとなります ※